田口卯吉著

日本開化小史

四

和書門
類 三五一〇 號
一一 函
八 架
六 冊

内閣文庫
和書
類 三五一〇 號
六 冊
一四〇 函
二 架

内閣文庫
番號 和 3510
冊數 6 (4)
函號 140 49

国立公文書館
National Archives of Japan

田口卯吉著

日本開化小史

田口氏藏版

日本開化小史卷の四目録

第七章
千三百年代ふ至りて日本の文學始めて世に出でし事
千六百年代まで文學に有樣
千六百年代の末漢文一變せし事
同和文の始めて世ふ出でし事
和文に顯はれたる想像
千八百年代文學の進歩
第八章
千九百年代文學の大ふ進歩をし事

帝國圖書館藏
日本政府圖書

日本文章の基礎立ちし事
編史の体裁改良せし事
法律の成りし事
二千年代の末有益なる著書多く顯はれし事
佛法の文學に効ある事
二千百五十年以後文學次第に退歩せし事
其時々の事情と想見して文學は消長を知る事
想像の沿革

日本開化小史巻の四

田口卯吉著

第七章　日本文學の起原より千八百年代まで

文學とは人の心は顯像なり大凡そ人の心は世に顯はるゝものの其種固に多し或は政治の上に顯はるゝものあり或は風俗の上に顯はるゝものあり文學とは文章の上に顯はるゝものなり其顯はるゝもの智あり情あり情の文章に顯はるゝもの之を記事体と云ふ歴史小説の類之に属す智の文章に顯はるゝもの之を論文と云ふ學文論説之に属す此二者共に是れ文學の本体にして其文章に顯はるゝに至りては互

ふ相錯綜して明に判別そべうらたと雖ども其性質自ら相異なる所あり蓋し論文ハ研究を主とし物の理を説き以て讀む人の智を服をしむるものなり故ふ之我記をるれ人を必ず高尚の智なかるべうらす記事ハ想像を主として物れ有様を寫し以て讀む人の情を感ぜしむるものなり故ふ之我記をはをの必ず高尚れ情なうるべからうぞされぞ智と情との進歩ハ文學の史れ最も明ら示さばべうらざか所なり人の心を得て區別そべきをのふあらぞ何れ人情まて何きう智かりと云ふ境界も知るべかうぞ余熟ら其真状を考ふるに心を五官れ集りふして五官の外ふ心あるとを思ハきざるなり然れども今論辨の便ふらんことを求めて外物より感觸を受くるもの我情と云ひ外物を制せんとそはもれを智と云

ふ今其智情の進むと進まざるとふ因りて人の心れ有様如何ら異ふるやを尋ぬるに初代ふあるては人人衣食ら急ぎして物事に研究を經ざる部分多きぞ為めふ凡そ心ふ解し得ぬ事ハ大うたを之を神業ら皈そること多し是其智の有様なり又數多の事物に接すること多れく數多の交際をも經ざる我以て其想像淡泊して味なく迂遠にして曲折少れし是れ其情の有様なり文運進歩の後ら及ひてそ人々一事ら其心を注き其源因を發見そはふあらぶきそ安んぜざるを為めお物毎に研究を經たる部分多し蓋し初代の人とても今日の人とても職掌外の事ハ多くハ

世人の言ふ所にくく信ぜること常なれど各自職掌上の事ふ就て研究に増進するに従ひ世人一班自ら迷謬の事を信せざる様になることなり是に於て乎自然の道理を説明する所の學問社會の有様と進捗せしむる論文等出で来るなり是れ智の變遷なり人ハ源因を探ぐるの心あり野蠻の人ハ禍災を神業に帰し開明の人ハ變動を理に尋ぬるが如きも皆理を探るの心ふり此源因を探るを即ち禍災を免れ實利を求めんとの心にて生を保ち死を避くるの天性に出ぜるなり　又交際も漸く廣くなり各種の人情風俗とも見聞をはぐ為めふ想像甚た静うに且つ緻密にして詩歌小説等ハ樂まを趣向出つ是れ其情の變遷なり要するふ記事の巧みふるを想像の密なるにあるを論文の精なるハ智ハ洽きふあり其精粗巧拙ハ則ち社會貨財の進歩に従ふそのふして之を以て開化の進不進を徴證をふふ足るものなり議者或ハ言ふ詩賦の想像を古に盛んにして後世ふ衰へ學問の研究を今日に盛んふして古代に欠くと特に知らぞ両者共に時世の隆盛に従ふく進むものふして詩歌ハ特に先づ顯ハるいもれたること我ぞ日本の文學史を見るものは其言の虚ならざるを知らん二千二百年代に至りて封建亂離の災日本諸州に洽ねくして世の有様彼ぞ如く衰へ亂さたりしうぞ文學の式微亦た極まるり今更に往時に溯りて日本文學ハ本

源を尋ね其流に沿ひ其變遷を探りて二千二百年代まで下るべし熟々我が國文章の最も古きもの茂尋ぬるに千三百年代より以前の事は藐として考ふべからず蓋し我國古代にありて文字なく人々唯々言語を以て其意を通じたるのみにて彼の祝詞宣命及び和歌の類も文學あるに前久しくより行はれたるが如し其後三韓入朝し百濟内屬するに至りて漢字漸く我國に傳はり其音を以て其儘に和語を寫すことゝなるに之を假名と云ふ（呉音先つ入り其後漢音入りしものなり古事記皆呉音なり）（山崎美成著文教温古）然れども此時より以後專ら行はるゝ所の漢文を學ぶに あきて和語を以て文章を綴ることゝなる全く行はるゝ唯た

和歌祝詞若くは宣命のみ此假名を用ひたるが如しされど我國古代の文章にして今に傳ふるものゝ實に漢文を以て始めとす即ち千三百年代上宮太子の十七憲法こそ最も古きものなれ之に次ぎて千四百年淡海帝の時より以後漢文愈々盛んにあるに此年代に近江朝廷の令太寶令古事記（太安麻呂撰）日本書記（舍人親王太安麻呂清人等撰）養老令の撰あり千五百年代に至りて續日本記（菅野真道藤原継縄）大同類聚（齋部廣成宿禰書）古語拾遺（近江朝廷より奈良朝の末まで）懷風藻（清原夏野等）性靈集（空海の撰）秘藏寶鑰（二書）新撰姓氏録（萬多親王）令義解（清原夏野等）での詩集なり撰者詳ならず（亦詩集なり）經國集（撰者詳ならず）文華秀麗集（良岑安世滋野貞主等の撰）（三船なるべしと云へり）百年代より千五百年代の末に至る千六百年代に

至りて日本後記（藤原冬継等撰）文徳實録（藤原良房等撰）續日本後記（藤原基経）三代實録（藤原時平）内裏式（藤原冬嗣）類集國史（菅原道真）弘仁式（藤原冬嗣等）貞觀式、延喜式、本朝文粹（藤原明衡）の撰あり茲に至りて我國の文學始めて顯はると云ふて可なり蓋し史を紀し事を論ずるは人心進歩に成績すること之れ其以前に比すれば大なる懸隔れるべしと雖ども時世の幼稚ふる所ふ當りてハ其成績の美を見る甚だ難しとせざれば夫の千三百年代より千六百年代に至るまで編纂せられし史類を閲するに其最も意を注ぎたる所は歳月時日に詳密、神祇の祭祀、赤雪、白雉の發現等の類並に其外當時の人に心況以て祥瑞妖孽と認めたる事件を統記し

たるまでふて絶えて事件の要不要を識別し取捨筆削の智を用ひざる所ふきが如し故に後世の史家が認めて以て編史の要點となし一事件と他の事件との關係を示す等の事ふれ絶えて心付くばかりのみならず彼の支那の史ふ多く記する所の一人の品行性質に公衆に及ぼしたる影響をも記する事ふし唯く面前に顯はれ出たる事件を其儘に記載するふ止まるのみ而して其如何なる事情よりして起るに乎に至りてハ著者全く注意を欠く蓋し社會事多し史をるもの唯有要の事件を記するふ止めざるべからず然るふ當時に史更に之れ削ることなく苟くも事あるを云へば人事ふ

關係なる事までも之を記載し唯だ卷帙の洪澣なる徒
以て功績あるを心得たるが如きを實に惜むべきなり
要するに是等の年表にして歴史とあらざるなり史を
紀するに於て此の如き事を論するに於ても又其
弊を免れず蓋し人の事を論ぜんとする先づ一箇の定説
なかるべからざることを俟たざるなり然るに古
人の序文若くは論文徒書をる徒見るに已れ先つ一己
の定見あるを而して后筆を執るに為めに
大うたを四六の句排偶の文徒以て外部より議論を引
出さる徒勤めたるが如し抑も文學は人の心を顯はすも
のなり人の心固より四六を以て量り得るものにあら

ず天下の事物亦初より排偶より成らずして滿胸の
議論徒吐露せんと欲するを必らず心を導く處に從ひ決
して文章上の法則に掣肘せらるべからざること理の
當然なり然るに議論なくして之を記すが故に法則の
手引に依りて言ふべき事と思ひ出さんとして其体決し
て眞体にあらざるなり之に加ふるに至難の文字を連
称して強ひて古語を博さんと誇らんと欲するの弊たり夫
れ十分議論あるを之徒記するにそも古字を用ふる
解し難きものに初めより言いんと欲する主意か
くして強ひて古字を用ふるに於て豈に高論を聞くを
得んや是蓋し人心の未だ進まざるに當りて至難の

外國語を以て之と文章ふ顯ハさしめたる致を所ふり唯僅うふ三好清行、菅原文時の二封事の見るべきあるのミ

然ども文學進歩の勢ハ永く文体ハ渋滞を以て得て抑制そべきふあらず千六百年代の末より彼のごとくるしふ漢文の体を漸く日本の語法と親和し稍く人々ハ自由ハ記載し得るハ体と得るふ至れり彼の將門記、純友追討記の如き其文体今日より之を見ば極りて奇異ハして驚くべく笑ふべきものあるとと雖ども之を彼の法則ハ拘束せらるを之を國史論文ふ比それぞ自ら其意伐述ふ」に滑らかなる姿あるを且つ此等の書ハ決し

て巧と稱そべきふあらずと雖ども稍く人の動作より世の事情を述へんと欲そはふ適そるあるが如し此變成の文法終ふ一箇の体裁を為し書翰の往復日常の日記等ふも此体を用ふる事となるに之伐日記体と云ふさ社ぞ是より文章大ふ世人ハ親接し漢文を以て歴史を書し格式を書そることを全く衰へ一ふ此体を以て記載そる事とふ社り其最も大なるその九歴記、權記、岡屋關白記、小右記、春記、水左記、經信卿記、長春記、台記、山槐記、未海日次記、吉記、明月記、王華殿記、三長記、の類ふして之をよむふ味ふく其体俗醜を免ぎず其書中或ハ後世史家の撮摘と要そべき事件を記さバるふあらずと

雖ども之を要するに古人筆削の智なく凡そ耳目に觸るゝ所々事の要不要を問ふなく皆之を洩さゞるを務むるの姿明らか以て其文体の稍〻自由を得るに及んで却て無用の事のみ多く記載し讀むもの之をして當時の事情を知るに苦しむに至る

斯く漢文一變の時に當りて日本の語法を以て文章を作る事漸く世に顯はるゝに至る之れ真に日本文學の幸なるべし蓋し和文の最古きもの伝云はゞ古事記に如くなるはなし然れども其語や固と古語なるを既に當時の語にあらざる當時の語を以て記載するに至りしを平假名片假名の發明あるに之を以て和歌を記すこと

大に行はるゝに歳月の久しきを經て世の習俗に親和し終に日常の言語を筆に寫すに至るの時に在りと見るべし

斯の如く千六百年代の中頃より和文を以て紀行或は小説の類を記すに漸く起る今其一二を示さんに千六百年代には伊勢物語（作者業平朝臣なりと云ふ）竹取物語（作者は源順なりと云ふ）紀貫之の土佐日記（紀貫之の作なり）住吉物語（作者詳らかならず）須磨記（菅家の作なりと云ひ傳ふ）宇津保物語（作者確らかならず）大和物語（作者滋春とも華山院とも云へり共に確らかならず）の類出でたり千七百年代に至りて落久保（作者源順と云ふも確らかならず）濱松中納言物語、源氏物語（藤式部の作）狭衣（大貳三位の作）泉式部物語、とりかへばや（作者詳らかならず）枕の草子（清少納言の筆）松島日記（清少納言の作と云ふ確らかならず）紫式部

日記藤式部　蜻蛉日記右大将道綱の母　の類出でたり是時ふ至りて其用語漸く廣く其文字漸く艶ふ春宵秋夜の眺を記し少年佳人の情況寫そこと眞ゝ細うふ且つ巧みを添へたり嗚呼文字を以て事を記し且つ論ぜるゝ至難の業なり然きども自國の言語を用ひ自國の語法を用ひて之を書そるふいうでう其心の働を顯ゝに至らざらんや千七百年代の和文ゝ真ふ我ゝ日本人心の曙光ふして恰も矇昧の雲霧を開き晴明の影を現そゞ如し寔ふ目覺ゝく見えまゝを

蓋し文學ゝ史い文章の和漢を撰ゝそゞ唯だ其主意趣向の巧ふして味あるをこそ取るべきゝ彼の漢文ゝ論理なゝ体を讀ゝ来りて和文の有様を顧みきゝ其事の顛末あを其語の味ある固より數等の上ゝあをと云ハざゝを得ゞ然れども不幸ふして和文の起源ゝ多く婦女子の手にのみ成り男子ゝして之を記ゝ賤しみ嫌ふの有様ゝりしうば文章ふ最も必要ある精神を欠き且つ其語句冗長ふして各異の事情ゝ乏しく徒ゝ一様なる有様を記すのゝゝりうを彼の物語ゝ諸書の如き當時の幼稚ふる時代ふあをてゝ極りて巧ゝにして且つ其進歩も極めて速うふりしこと疑を容れゞと雖ども活潑の氣力もなく又人の注意況促をべゝ有様の變化もゝふゝ當時人心の幼稚なるゝと紙示をゝ明證ふゝ

べし。蓋し小説の味々各種の状態を集むるにあり文章の巧ミ抑揚頓挫の其節を得ルあり然るに此物語の如き多くハ唯優遊閑暇なる雲上人の癡ゝなる有様を長ゝしく編りなすまでにて其他を記すことあるなし。嗚呼文學ハ人の心を顯ハすものなれ藤原氏以来の柔弱なる習俗と以て活潑敏捷の文章を得んこと固より望むべからざると雖とも其文の氣力ハ亦驚くに堪へたり夫の源氏の如き狹衣の如き優美の情極めて多し。と雖ども決して此弊を免れざるなり蓋し人智の進むに從ひ用語の愈ゝ廣く文章の愈ゝ精なること自然の通理なる故以て用語の廣く文章の愈ゝ精なるを見ハ直ちに認めて以て人心の進歩せしこと絶證とすべし。千八百年代の以前にあるべ千八百年代の以前にあるべ

あるべ。漢語の用法尚ほ未だ日本の習俗に親和せざるを有て漢語和文各ゝ分離の有様なりしが歳月を經るに從ひ漢語漸く世俗に浸染し千八百年代の末千九百年代の初めより彼の所謂和文中に漢語と交ふること愈ゝ多くなりたり此時に當りて漢文の變体なる日記体ハ愈ゝ日本の俗語に和し日本の俗文ハ亦漢文の句調に近似し其間自ら一種中間の文法と生ぜるに崩芽を發せり余ゝ之を日本文と云ふ即ち當今まで用ひ傳ふ文章を云ふ。ふり千八百年代の末榮花物語と云へる一

書四十巻世ふ出でたり其著者藤原為業なるとも云ひ又た赤染衛門ふりとも云ふ確ならぬ千九百年代の始めふ至り續世継十巻世ふ出ぐたる其著者亦詳かならぬ其他藤原通憲ぶ本朝世記三十巻を著ッせりと云へども惜むべ〜今ふ傳はらず是數書々實ふ我ぶ國ゑ於て日本文を以く歴史を記載ちゃふの濫觴ふり蓋し物初めより完全ふりと得ぐ前の二書ゑ如き未だ彼の冗長ふり物語の文法を免ゑ社ぐして其編史の体と恰も彼の物語ふ於々ぶ如く月の宴夕霧雲井、子の日、七つ春等の題目ゑ掲げて篇くを區分したる者ゑり且つ其記ゑせ〜所も重ゑふ帝王の遊宴、大臣の榮華、后妃の入内等の有様と記ゑ〜其間ふ和歌を交へ以く女〜しゑ状態と寫せしものなりさゑれゑ其意ゑ注き〜所決して國家有要の事件と稱ぐべ〜ならぐと雖ども之ゑ代何事も差別なく混合ゑて記載したる六國史等の錯雜ふりた比ぐ社ぐ稍く選擇の智を存すと云ふべ〜且つ當時の情勢ぐ為ふ王室優柔の極なる代以く所謂政事上の重もなる事件とゑて人目ふ觸ふ所も遊宴漁色ふ過ぎざりゑ也も知ふべ〜ならぐ今之を記〜て後世の史家をして古情の一斑代窺ふを得せしめ且つ將來進歩ゑ第一階梯と構成ぐはと其功極りて多し唐人の說大ふ我國ゑ行ふ社學校と王朝の時ふ當りて唐人の說大ふ我國ゑ行ふ社學校と

建く學士を優遇そ百類の事ハ仁政なを美舉ふりとし
く稱賛をら社所謂聖人の道を政府社以く教育と保護
そうふあるが如く見做せしものと思ふ近江朝廷ハ
時千四百年代始りて學校を建らき奈良朝ふ至りてを諸國
ふも學校と建らき且つ大學寮と設々てこと式部ふ管
せられそり（當時漢文を讀むこと未だ片假名の發明ふき
ず為めふ和讀にそをこと點と云へるもの
を用ひたりをこと點と或ハ或ハ或ハ或ハ
一等の點と漢字の四隅上下ふ附して其働と顯ハそを
り漢を漢と讀を漢い讀むが如し此是より以
方々片仮名の行はれし後ち廢きたりとぞ）
後歴朝金銀田園等を學士ふ給して文學を奬勵し給へ
りこを學文料と云ふ又燈油料火の望等の名あを桓武
天皇都を平安ふ遷し給ひし後ち又學校とこを建く教

師と唐より迎へ又た學士を彼國ふ送り給へり是より
大江菅原の二家起りて專ら學事を管せり其外貴紳の
學校又多し弘法大師の綜藝種智院檀林皇后の學舘院、
藤氏の勸學校源氏の奬學院等一時盛んふりき其勉學
そは所の經籍々毛詩、尚書、禮記、周易、左傳（五經と云ふ）周禮、儀
禮、公羊傳、穀梁傳（以上之を加へて九經と云ふ）論語、孝經、老子、莊子（以上之を加へて十三經と云ふ）是きなり王朝の文學と奬勵し給ひし事至
れりと云ふべしさ社そこそ其時世の疎野なりしふも
得似ぞ六國史其他律令格式の如き浩瀚の書類と編む
事をも做し得たはべし然きども人智の度ふ至りてハ
必ずしも政府社奬勵ふ由りて增進そへきものふあら

ざれぞ今に至りて見るべきものゝ唯だ浅薄なる大冊の高閣に堆きと見るのみ抑も學士なるものは何ぞ為ふ他の職工よりも重んぞべきや文學ふる者ハ何ぞ為ふ他の貨物よりも尊ぶべき乎其功績の人類に及ぶ所如何に相異なる乎余を以て之を見るに更に貴重そべきあるを見ざるなり然ら況んや徒に古字に通し古書に明らかなるのみに學士をや抑そ人心の進歩ハ貨物の進歩と併行そべきものなるぞ今其貨物の進歩を妨げて特に文學のみを感んならしめんと欲そは恰も車の兩輪の一を退けて他を進めんと欲するに異ならぞ其目的を遂ぐること能ハざるなりけるぞ見るべし王政の柔弱に歸し學士を保護そは能ハざるに至りて我國の文學漸く獨立の萌を得其將さに傾覆せんとするの時に至りて始めて見るべきの書あることを之を自然に任そるも何ぞ文學の衰零を憂へんや況んや自然に任して衰ふるもけそ即ち人世に無用なる明證なるをや

第八章　鎌倉政府創立以後戰國ふ至るの間日本文學の沿革

千九百年代ふ至りて我國政事上ゝ起りたる事件即ち鎌倉政府創立の一事ハ文學の上ゝ於ても非常の進歩を促せしもなり蓋し天下非常の改革々非常の感觸を人心ふ來さゞハ伐得ぞ熟く此革命の成跡を考ふるふ其及ふ所特ゝ政府設置の場所を關東ふ轉移したるのみに止まらず上ゝ帝室專有と思ひ來りたる政權も自ら帝室を離れ去りて武臣の手ふ歸し下々萬民管理の職ふ任じ地方ゝ事務を理めたりし國司も其權を殺ぎれく地頭の威權諸國ふ興立しつゝあり此世運の移轉ゝ際ふ立てるものハ其方向ふ迷ひて驚駭せざ

ること得ざるべし殊ふ其以前より例し少なき事ども多く政事ゝ上ゝ出來て一天萬乘の尊きも數く幽囚の辱を免れ給ひざるし類の珍事續くとして踵を接せしうゑ太平ふ慣れ榮華に酖ゝ都人等如何でか恐怖せざらんや此時ゝ當りて夷と賤と慣れたりし東國の男兒々都ゝ攻め入り都の人々關西ふ追ひ其他人民の移住諸國の間ふ起りて人々新らしき風俗を見新しき言語伐聞くふ至れり抑も人智々物ゝ接するハふ長し人情々事ゝ觸るゝふ精しきもの多ぞ彼の數百年來依然として運動なき有樣ゝ人々ぞ此新らしき世間の現像を目擊するふ及んで自ら數多の元素ゝ胸中

小貫徹をはぶくんばあらざる此元素や則ち鎌倉政府の勤謙なる政務の下に愛育せらるゝ爛熳たる花を開き馥郁たる香を發するに至りし事誠に時日を費さざるも千九百年代の中頃に至りて大鏡水鏡の二書世に出て此二史の如きを大に歴史の体裁を簡明にし後の世の人をして古代の沿革を知り易からしむる好書なり蓋し此書未だ決して國家の有要なる事實を記せるものと稱すべからざる又決して事實と事實の關係を記せるものにあらずして徒に帝王大臣の歌詩咏ゝ詩を吟せらるゝ事ども伐記をもて一篇の本主と為すが如きを免る能ざると雖ども之を彼の千八百年代の

末千九百年代の始めに顯はるゝ榮華物語及び續世継等に比するに編史の体裁大に備りて所あり即ち物語の体を免る能て歴史の体に近似するを見るべし蓋し榮華物語の世に出たる頃すでに我國に於ては正史を記すに事は必らず漢文を用ひるにて漢語交りに和文を以てせし事絶えてなし和文を重ぶる草子物語の類を記すに用ひたる習俗なりしかば榮華續世継の記者が此文章を以て歴史伐記に當りても自らに嚴格の体裁を用ひるまでに勇進し難きの事情やあるべくん優雅なる題名を掲げて篇章を區分せり然れども此二鏡の顯はるゝ頃に至りて世の勢既に正事實

のもはまでも此文法を用ふる有様となるべしうば斯く治世の順序を逐ふて歴史を記ふを敢んぞ仏ふ至りしものと見えたり是き以て時世の進歩を知るべし之ふ續きて葉室大納言時長の著せる保元物語、平治物語、源平盛衰記（保元平治二物語々語句軟ふして漢語も亦少ふ而して源平盛衰記々稍ゝ漢文の口氣を帯ふ故ふ二書同一の手ゝ成ること疑ひなきふあらぞ然れども今群書一覧ゝ據りて其作者を葉室時長ふ及び信濃前司行長ふ著せる平家物語の數書世ふ出てたり此二氏の記ふ所を見るふ行文の巧ミなると体裁の具りたるとに於て遥ふ千八百年代の諸書ふ超越せるのみならず實ゝ後世の史家として長く之に據ゝ編史の術を試まむるの基を為せり蓋し文學の進歩々文体の自由を得て十分ふ思想を吐露せしむるふ因ふなるべし而して文体の自由ふ得たる言語の増加を以て第一の助ふ漢語の和文ふ入りしより文章の用語大ふ増加し行文ふ自由を得るふ至ると雖ども千八百年代ふあるて未た十分ふる親和を遂ぞずして自ら分離の体ふあらず然るふ二氏出つるふ及んで漢語を以て活潑勇壮なる状態を記し和語ふ以て幽鬱悲哀なる有様を顯はし相交へて以て色ゝ ふ趣きを寫し之を統ぶるに文章ふ最も有要なる想像力を以てせしうぞ無限の情趣毎句ふ間ふ存して誦讀ふ際自ら甘味の湧出るふの思あらしむ是ふ於て我國

の文章漢語和文の間に胚胎して始めて當今日本文學の基礎を固ふせりと言ふべし

然れども二氏の日本文學に大功あるを決して其想像力の緻密なるとと文章の体裁を修正したりしとに因るに彼の世に所謂記事体即ち事實に因りて統記せられ文体を以て歴史と記載せし事是なり抑も歴史とは事實を記すものなり故に事實の種類に因りて沿革を示さざるべからず然るに我王政の時は編年の体即ち年度を以て事實を類別せるの文体行はれて全く關係なき事實をも年月さへ同じければ之れを一文の中に混記せり而して其年月茂詳らかなる

なる史家の最も精神を籠めし所なりさはあれど當時の政事の有様如何なりしかを人民の情況如何なりしかを聞うんと欲するは全く之を記さざるのみならず其記せる所の事なる其緒茂見出せること甚だ難し唯菅公の類集國史のみ稍く其緒を見出せる便を與へて人をして其卓見に服せしむるのあるとと雖も其記せる所の事實は矢張國家必用の事にあらざりしを然るに二氏出るに及んで年月の古今に關せる事柄に從ひて類別し之を記載せしを數代の事件自ら一讀の下に瞭然たるを得たり嗚呼天下の事多し其沿革一く相異なり之を述べんと欲すれば決して編年の欄中に嵌入すべう

らぞ二氏乃ち其約束を解き人心伐して自由に發露せしむ其功多しと云ふべし且や此數書の著作たるや歴史漸く和歌の端作りの如き体を免れ政事上の事件を記するに至り又人の品行言語は政事上に及ぼせる事どもを記せり此体裁は一たび世に出てしより以後數百年間の史家皆之に據りて以て當時の時情を記載し後の世の人をして興廢存亡の理由を窺ふを得せしめたり其功多しと云ふべしされど見るべし我國の歴史に於て政事上並に人民の有様を詳うにそを得たるは實に保元平治以後の事なることを

鎌倉政府の治世は斯く編史の体裁と行文の方法とに於て大なる進歩を示せしのみならず實に法律の點に於ても亦後世の模範となるべきその基出だせり蓋し王政の時に當りて制定きらきし法律は全く唐の制度を移しゝものにして果して能く當時の習俗に適合せしや否は今之を知るに由なし然れども武人地方に群起し封建の元素を形成するに及んで其法律亦た地方を制するに足らざるべき事は前に述べし所にて詳うなるべし鎌倉政府の時に至りて即ち其習俗に因る所に從ひ法律を編制して以て國体を固くせ貞永式目則ち是なり此法こそ我が國に於きて始めて自國の習慣に基さて制定せるものにして能く時世に適し後の政府

までも長くこゝに據らしめたるは編者の榮譽多しと云ふべし

鎌倉政府創立の始めは當時文學の進歩此の如く著しかりしゝも其治世の間世に顯はれたる書籍皆見るべきもの多し今其一二を擧ぐんに承久記著者未詳今昔物語古今著聞集辨内侍日記讃岐典侍日記源親行の東關紀行の類は或る政事上の得失を議し或る數多の奇事を纂集し或る佛理を演述せしものにして凡て見るべきの意見を存せり而して其文章は乃ち和文に漢語を交へたるものにして其体裁亦た趣きを同ふせり

然れども是時漢學より一變せし日記体の文尚ほ行はれざるにあらず彼の愚管抄愚昧記玉海玉藻明月記山槐記平戸記東鑑百錬鈔仁部管記吉續紀の類々朝廷若くは鎌倉政府の官吏の手に成りたるものにして依然として往時の紛雜なる体裁を存し更に改良せざるものあるを見ばなり又日蓮上人の註畫讃親鸞聖人傳繪及び元亨釋書年中行事の如きも皆此体を以て記せりされど當時と雖とも公けの尺牘日記等々尚此体を用ひそはこと能知るべし唯だ其愈々和語に親和したる有様を見るのみ

蓋し人智の未だ進まざるに當りてや自然の道理を講究し人類の幸福を增進せしむる類の事々未だ十分に

行ハれぞして却て人心ハ恐怖をしむる事件ハ人心と集むることを多くさはぐ太平の時ハ當りて世に顯ハれたる事件々常ハ曖昧の内に埋もれ却て鬪爭戰亂の際に當りて人を殺し城を攻むる勇將猛卒の武者振のみぞ史上ハ詳ふ諸國の歴史其揆を同ふせり鎌倉政府の治平伐致を百五十年其間執權並に評定衆の智略あり功勲あり事々古史ハも數ぞ述がは所なくて且つ足利將軍の時ハ至り大に武人の羨慕する處なり事々當時の史ハ見ゆ然きども此平和ある行ひを當時の史家ハ目を注ぎ所ハらざる以て如何なる政道なりしかを如何なる文勲なりしかを今日ハ詳ふ

する能ハざるを寔ハ惜むべきなり此一事以て鎌倉時代ハ於て文學尚ハ未だ民間に洽らざる人心の度未だ進まざるを知るに足るべし

うゝは有樣を以て日本の文學殆んど百五十年ハ太平の雨露に浴せし後再び政事上の動搖出來て鎌倉治世の文學の最後ハ光耀を發せしめたり是ハ即ち二千年代の末元弘建武の爭亂なり蓋し前文ハも略ぼ說示せし如く戰亂を到底文學を進捗をしむるのハあらざると雖ども多く人心を蒐むるの事件なる以て其時代に適ちしハ進度ハ著書多く此際ハ現ハるゝことなりされど元弘建武の亂起るハ及んで鎌倉時代ハ養成し

たる文學の種子ハ更ふ熟練の香を添へて世ゝ咲出て
そう今其最も著明なるものを列記せん
且有益ふゝものを列記せん
ふ増鏡一條冬良の著なり前の大鏡と合して三鏡と稱そ　保暦間記未詳　神皇正
統記源親房　太平記作者極め多し　園太暦太政大臣公賢　船上記未詳　伯耆
巻未詳　關城書裏書未詳　皆な見ゝべきの書ふり其述ふゝ處
々多くハ戰亂の有様若くハ帝統將門の確執等を記ゝ
そふ止まゝと雖ども其間或ハ政事ハ得失帝統の正潤
並ゝ公家武家の盛衰ハ基く所を論そるもの多し其記
者の智力相同しからぞ其議論素より功拙なきにあら
そと雖ども其文体ハ則ち盛衰記平家物語等と同一の
そのふて稍く漢語と交ふゝの多きを見ゝ就中太

平記の如きゝ之を用ふゝ事極めて多く稍く博きふ誇
りの姿ふきふあらぞ之を要そふふ文章の點ふ於てハ
未た盛衰記、平家物語等と輕重し難しと雖ども其眼目
の注く所ふ至ては當時の書却て往時より勝ゝ所あ
り就中正統記の如きゝ日本古来ハ沿革を統括し國家
有要の事實を網羅して殆んと遺ハ處ふし其王家ハ衰
頽武族ハ興立等ふ注目し其源由を推究すふが如き真
ふ得がたきの書と云ふべし蓋し我國ふ於て社會の有
様ハ記し其變遷の基く所を論そる書籍實ふあること
なし盛衰記、平家物語の如きゝ其文体極めて巧みふり
と雖ども著眼の鋭なるふ至りてゝ遥ふ之を二千年

代の末二千百年代の始りふ顯はれたる諸書ゝ讓らざるを得ざ而して正統記を實ふ鋭の鋭ふるものあり之を後世の歴史ふ比それぞ其議論尚ほ議すべき處多く其体未た備はらぬ所あるとと雖ども二千年代まて此書あるを以て當時の文運を後世ふ誇稱するふ足るふり

此時ふ當るて隨筆の書亦た見るべきもの多し明恵上人のほろ〳〵草子兼好法師の徒然艸は如きを議論も高尚ふして如何にも手際なる書体なり而もて其論稍て心理の事に及ふ所あるを實ゝ日本の文學ふ飾るは一具と稱すべし又程朱の學も此時始めて我國ふ傳りり玄

恵法印之ふ學びしと云ひ傳ふされぞ我中世文學の最も盛んなるは此時ふあるとと云ふも誣言ゝあらず

蓋し學問上の研究を人心の中ふ發するふ事は後世開化の結果ふして經驗少き世ゝを絶えて現はさざる所なるとし雖ども彼の想像力ふ至りては早くより人の心ふ結ふもれなるはきぞ鎌倉時代の諸書中ゝも智慧ふ進むゝれ資料ふ至るては殆んど之ふ欠くと雖ども情を動ゝその趣向ゝ至りてゝ既ふ大ゝ文章上に現はさたり其所謂進歩ふゝそのも實に其想像の増進ふ外ならざるふり當時の史を記し事を論ぜ多ふ見るふ多くは皆無常と觀し物の憐を說くこと多し抑も此想像は全

く佛法より由来するものにて王政の時より未だ十分ふ文章上ふ顯ゝ社ざりき源氏狹衣榮華の如き艶ハ則ち艶なりと雖ども未だ悚然として恐ゝの想像少し此想像源平盛衰記より起り平家ふ至りて最も盛んなり太平記、徒然草ふ至りて極めて密ふり其他神皇正統記の博識ふして卓見ふる保暦問記の簡單ふして靜肅ふも佛法の想像ふ至りてゝ自ら全篇ふ貫通せるもあるふ如し抑も此の如き所以のものゝ王政の時より佛道久しく人心ふ浸染し鎌倉政府の時ふ至りて禪學愈ゝ盛んなりしう為めふ文學の上ふ大ふ顯ゝふ至りしふり而して我國の文學此想像の為めふ裨益を

得たること少くふあらざるなり

鎌倉政府既ふ亡び封建武族の海内ふ割據をしより世の中次第ふ衰へ亂ふ亂ふして文學も亦隨ふ退歩の姿となりぬ然れども二千百年代の中頃即ち足利氏治世の始めふ當りて鎌倉以後の文物尚存せるものあるを以て文學ふ見るべきものの少なからず南朝の末路ふ當りて世ふ出でたる櫻雲記、續神皇正統記、南朝記傳、梅松論、吉野拾遺の如き前の諸書ふ及ばざる所多しと雖も其文法整ふ所あるを以て當時の事情を詳ふするふ必ふ必要の書なりとすべし此時ふ於てゝ未だ遽ふに文學衰零せりと稱する能はざるものあるを其後封建潰裂の

勢ひ日ふ月ふ増進し世の有様益〻危殆ふ迫りしくんば
當時ふ顯ハ社そる書も從ひて情味を失ひ其文章愈よ
枯燥そるふ至れりさきぞ應永記ハ明德記より劣り嘉
吉記そ應永記より劣れり其後椿葉記、鎌倉大草子此書ハ稍
く見るべき處あり應仁記の類あるを雖ども皆文意の明らならず
ざるもの多し要そるふ二千百五十年の頃より殆んど
百年間文學次第ふ退歩の姿を示せり真ふ歎ぜべきこ
となを蓋し斯く文學の衰微ふ至りも彼の王政の時ハ
如く外國の古語ふ汲〻として人間天性の智力を働う
ゑむる能ハざりしう如き弊風の行ハれしふあらんば其
文体の自由を極めたることそ恰も鎌倉時代と異ふら

なるまども唯人〻安然として思想を此點ふ注ぎ難き
世の有様とあり〻ぶゆゑなを嗚呼海内麻の如く亂れ
群雄割據そはの世ふ至りて人民豈ふ文學代事とする
の暇あらんや則ち天然ふ打ち勝つれ志ハ去りて敵を
亡ぼそれ略となを筆硯ふ親しむの樂を散して奮戰鏖
殺の怒りとなふ茲ふ至りて終ふ文學の光を東洋孤島
の内ふ滅せり嘆そるに勝ふべ〻んや
思ふふ文學の消長を知るふ其記ふそ所の時代れ様子
を想見すふ為そ便利ふ〻べ〻れ彼の源平れ戰南北朝
の爭れ有様を思ひ見ふふ關東武夫の勇ましき王都の
小婦の美しふ其他攻城野戰の篠木を削ふ駈引きて顔

前に見るが如くに思ふふあらそや去りて應永二千零五十九年嘉吉二千百年の世は亂れ海内湧くが如きに至りて如何なる將士が智略あるべきか如何なる武夫が猛勇なるべきかを思ふに武勇の氣當時に減ぜぞ鬪爭射擊の術古より拙なからず殊に此時とても秀才佳人の全くなきにもあらず唯た其き文學の衰へるが為りに其人柄の慕ふべきふく事跡の好みそべきを見ざるのみ是社以て文學の盛衰を證するに足るなり

以上に於て略ぼ文体の變遷と智情の盛衰とを通覽したるぞ更に古代に回顧して文章上に現れたる氣風を一見するべし蓋し往昔千三百年代より千五百年代に

至るまで漢文のみ世に行はれ文章上研究想像の行はるゝに至らず唯渾沌として智情の未だ分れざる姿なりしは蓋し幼稚なる精神を以て至難なる外國の文章言語を記臆せんと勉め絶えて其他を顧みる能はざるが為めならん千六百年代に至りて日記体及び和文の二者出来て稍く人心の一斑を窺ひ得べきに至るも今當時に顯れたる想像を竹取うつぼ等に就きて考ふるに其感情全く當今の人情に相違し恰も異境に入り異人に逢ふの思あり如何ぞ斯る想像の心裡に發するやと疑はるゝ程なり蓋し當時の人未だ多く事物に接せざるが為に自

ら世ふあを得ぬ想像の胸裏ゝ發すふゝべ｜故ゝ其文も亦た素樸ゝ｜て更ふ味ひゝ｜然ゝふ千七百年代の末ゝゝ文弱の氣風都の内に發生｜滿堂婦女子の如くなをふたきぞ其文章稍く猥褻淫風の加あふ免ゝ社そと雖ども亦自からゝ艶美の情味を添ふゝゝ至社を而て千九百年代ふ至りて關東武夫の氣性漸く世ふ顯ハ社きれぞ活潑勇壯の氣又文學の中ふ加ハりたり是き即ち盛衰記、平家物語の氣と優と弦兼ね之きを讀ゝゝ樂ま｜き所以ふり是ゝを天下治平を致そ事殆んと百五十年人智始めて社會の大勢を見ゝと知る故ふ時勢論漸く文學の中ふ參入｜て文章自ら靜肅完備ゝ体

と致きゝ是則ち保曆間記、神皇正統記の自ら精神を存｜而ゝて嚴格の体あゝ所以なを其後ふ至りて武人擅横の世の中と成り下を殺伐鬪爭の災世雲を蔽ひ｜うぞ文章紛雜の姿となりて終ふ全く情味を失ふゝ至社り然きども之あゝ猶可ふり二千二百年代の末ゝハ全く之を失ふふ至れり豈ゝ哀｜ゝゝぞや嗚呼我國文學を史上ふ見ゝ近｜と為そべゝゝぞ然るふ王政の時之と保護ゝ失｜强ひく日本の精神を驅を外國ゝ文章と古語とふ注き之を｜て十分に發達すふを得せ｜めぞ鎌倉政府の世となを日本の文學ハ最も便利ふゝ文體を求めて發育｜終ふ我國文學の基ゐを立て｜

と雖ども又久しからずして封建亂離の世となり文學も亦世事紛紜の中に滅ぶるに至れり應仁の亂より以後德川氏の天下を制するに至るまで殆んど百五十年間文學更に再興の勢ひなく唯だ武人鬪爭の慘狀を見るのみ

物の理を究め其功用を知らんとすること固より智力に働きふして研究の部類に屬するものなれども其理を究め其功用を知るの後さてこそと感ずるの感情に至りてこそ即ち想像の部類に屬するものなり之を例へんに諸業無常是生滅法と云へる語の如きは萬有の理を說明したるものなれども其理を心に悟りて人生の墓なきを觀ずるに至りてこそ即ち是れ想像なるべきれども研究と想像とは其性質大に異なれども其相移るや恰も比隣の如き處あるに因り研究の淺き時に當りては想像も自ら淺く研究の進むに至りては相像も進みて高尚になるべし彼の赤壁の賦に西望夏口、東望武昌、山川相繆鬱乎蒼々、此非孟德之困於周郎者乎と云るが如きは往時を追懷するの智あるに因らずして感ずべきを想像に又客亦知夫水與月乎、逝者如斯而未嘗往也、盈虛者如彼而卒莫消長也、云々の如きは理從解するに因りて感ずべきを想像なるべし徒然艸に「あだし野の露きゆる

時なく鳥部山の烟立去らで住みとつかなりひふらバ如何ふ物のあり社もふうらん」と云ひ又「花ハさかるふ月をくまなきふ紙のゝ見ふ物うゝ雨すむゝひく月をこひ之社ふりて春のゆくへ知らぬそなかあはれふて情ふかゝ山と云ふゞ如きも亦た十分ふる研究ふくゝて能く言ふ尽ふ處ふあらず故ふ最も巧みふる想像を述べんと欲ふゞ最も研究を博くせざるべからず是れ想像と研究と文學上ふ於ふ相待つ所以なり

日本開化小史四の巻終

明治十一年二月廿五日版權免許
同十六年三月六日再版御届
同十六年三月出版
著述兼出版人　東京府士族　田口卯吉　東京牛込區牛込北山伏町四十三番地
定價金二拾五錢
巻之四
東京　日本橋通一丁目　北畠茂兵衛
書林　同　通二丁目　稲田佐兵衛
芝三島町　山中市兵衛
浅艸茅町三丁目　北澤伊八
小石川大門町　青山清吉
日本橋通三丁目　丸屋善七
同　通二丁目　小林新兵衛
賣捌

国立公文書館
National Archives of Japan